

四川の旅(2) 普賢菩薩が鎮座する峨眉山へ

寺西 俊英

旅の二日目、10月20日の朝が来た。今日は、峨眉山に登るので、6時半頃起床して7時過ぎにフロントで押金の精算などした後、朝食はあきらめてタクシーで成都駅に向かった。友人がまとめて窓口で切符を求めに行くと、峨眉山行きの高鉄は「成都南站」から出るのでそこで切符を買うように、と言われたとのこと。成都駅と成都南站駅は広い成都市内の北と南でかなり距離がある。仕方なくまたタクシーに乗ってそちらに向かった。結局早起きしたのに、9時32分発の高鉄に乗ることになった。切符を見ると「C6262号」となっており、頭文字が高鉄といったのにGではなくCとなっている。GaoのGなのにCとはなぜか良くわからない。料金は、二等座(普通車)であるが一人62円で日本円で千円弱なので安い。高鉄に乗るたびに安いと思う。朝食は友人がどこからか油条やヨーグルト等を買ってきたので、駅の待合室で食べることにした。

時間が近づいたので、切符を機械に通してホームに降り立った。今回は高鉄(?)は定刻に発車した。峨眉山駅に10時45分に着いたが、参考までに停車駅を以下に書くと・・・

成都南站→双流機場→彭山北→樂山→峨眉山

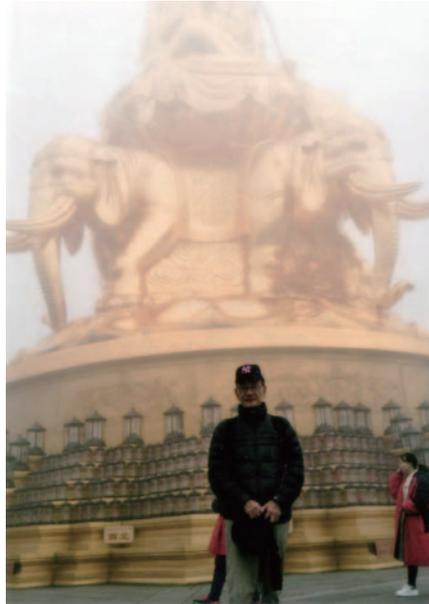
である。「双流機場」とは「成都双流国際機場」(機場とは飛行場のこと)のことで、成都の国際空港の名前である。双流は飛行場のある地名である。中国の飛行場の名前の多くは、飛行場のある地名が入っている。たとえば「大連周水子国際機場」、「青島流亭国際機場」のように、である。ちなみに北京空港は「北京首都国際機場」が正式な名称である。峨眉山は、峨眉山市にあり山の名前が市の名前になっている。成都から南西にあるのでこの空港も市内から南西の方向にある。一時間余り乗ったが快適であった。峨眉山駅は、よくあるマッチ箱を縦にしたような駅ではなく、中国風の洒落た建物である。日本ではあまりお目にかからない建物である。駅前がタクシーやバスの乗り場になっている。友人は、どのバスに乗

ればいいのかかわからないと言うのでタクシーに乗った。乗ったタクシー運転手は何と女性であった。中国には何度も行ったが、女性ドライバーは初めてである。男性ドライバーのようにカミカゼ運転ではなく、安全運転で親切であった。

20分くらい乗ったであろうか。タクシーは峨眉山市内の今夜の宿、「峨眉山瑞邦莫麗酒店」に着いた。チェックインをして荷物を預ける。お昼近くになったのでホテルで美味しい店を訪ねると、ホテルの運転手がお店まで運転してくれた。その店の名は、「孔老二豆腐腦」という。帰国した後、辞書で「豆腐腦」を調べると「おぼろ豆腐」とある。豆腐をやわらかく固まらせたものである。友人によるとテレビでも放映され、〈お店も小吃も有名だ〉と言う。麵の上に豆腐腦と肉が乗って暖かくて美味しい料理であった。食事は旅先での楽しみの一つだ。食後またタクシーに乗り峨眉山の麓にある客運中心、つまりバスセンターに向かう。友人が窓口で切符を買おうとすると、30歳前後の女性が近寄り、「峨眉山の途中にある零公里までだが、往復3人で500円でどうですか?バスより少し高いかもしれないがすぐに出発できるしいろいろと案内もするから」とメリットを強調し勧めるのである。要は白タクの部類のようだ。3人で協議し、時間を有効に使えるし彼らの車に乗ろう、という結論になった。女性は我々をワンボックスカーのある場所に案内してくれた。零公里からは専用のバスに乗り換えるそうだ。そこでまた切符を買わなければならないので確かに500円(日本円で約7500円)は割高ではあった。車は川沿いに山奥に進んでいく。霧もかかって来たのに結構スピードを出す。運転手に命を託すしかない。ようやく峨眉山の中腹にある「零公里」に着く。ここに専用のバスが何台か待機しており、我々は専用バスに乗り込んだ。乗車料金は80元。どの位走ったか覚えていないが、ロープウェイ乗り場の近くの「接引殿」という建物のそばの停車場に着いた。麓から頂上まで階段もある



普賢菩薩のパートナー。牙が3本生えている。



峨眉山頂上の普賢菩薩像(霧ではつきりしない)。

は台座から約40メートルもある巨大な銅像で菩薩の顔や象も東西南北に向かって造ってある。台座の下から菩薩の胎内に入れるようになっているので、入って見ると中にまた大きないくつもの仏像が安置されていた。ここにいるとなぜか幸せな気分になってくる。寺院は頂上には華蔵寺だけであったが、改装中で中には入れなかったのが残念である。この峨眉山には後漢(AD25年から220年)から寺院が建てられるようになったとのことで、明清時代は100前後の寺院があったという。車

ので、金を払いたくない人は歩くしかないが、なにしろ3千メートルを超える山なのだ。言われるがままに行くしかない。ロープウェイ乗り場まで歩いて行くと、またそこで乗車券を買わなければならない。ひとり65元だ。いい加減にしろ!と言いたくなる。

ロープウェイは大型で7～80人は軽く乗れそうだ。わいわいがやがやと沢山の人が乗り込みドアが閉まると、一気に上昇を始めた。かなりの急角度である。窓からは霧が深くなりあまり見えなくなった。ものの数分で上の駅に到着した。しかしここから20分くらい階段を上った。この辺りで少し頭が痛くなった。たいして気にはならなかったが、友人が高山病の徴候かもしれないと言う。この辺りはおそらく3千メートル位の高さの所に来ていよう。ゆっくりと歩くと、霧のためいつになったら頂上かわからない。足元を見ながら上ると、前方に幅の広い階段があり、その左右には象が向かい合って約50メートル間隔で置かれている。普賢菩薩と縁の深い動物だ。象の牙は左右とも3本ずつ有るがなぜかは誰も知らない。そのうちうっすらと金色に輝く普賢菩薩像が見えてきた。霧の中の菩薩像はとても神秘的である。

ようやく金頂に着いたのだ。金頂とは、前号で書いたが頂上に建てられている華蔵寺が太陽の光で金色に輝いて見えることからその名が付いた。そこには菩薩を仰ぎながら多くの人達が額づいて真剣にお祈りしていた。私も手を合わせた。この普賢菩薩像

やロープウェイそして建設機械などのない時代に四大仏教名山をはじめ多くの山々に、よくこのような宗教建造物が造られたものと感心する。当時の人々の信仰心の強さとエネルギーは尊敬に値する。

峨眉山の名の由来は次の通りである。蛾眉山とも言うそうで「蛾眉」とは蛾の触角の形をした眉のことで、転じて美人をいう。峨眉山の頂上から二つの山が向かい合っているのが見えるそうだが、その山の稜線が美しい眉に見えることから付いた名前だと言う。誰がこのような美しい名前を付けたのであろう。素敵な名前をもらってさぞかし峨眉山は喜んでいるのではないだろうか。峨眉山は昔から「峨眉天下秀」と褒め称えられているがこの霧では美しい姿を見るよしもない。峨眉山はまた「猿」が有名らしいがこの日は一匹も見ることが出来なかった。やはりもう一度天気の良い時に是非来てみたい。

また来た道に戻り、ロープウェイで下り、零公里から迎えに来ていた白タク(?)に乗って客運中心に着いた。そこで別のタクシーに乗り換え、ホテルに向かった。料金は60元くらいであったが、成都駅から峨眉山駅間の高鉄の料金と変わらない。峨眉山市仏光東路にある「峨眉山瑞邦莫麗酒店」に着いたときはあたりはすっかり暗くなっていた。夕食は火鍋を食べに行こうと言うので仕方なくついて行った。友人は火鍋を食べないと一日が終わった気がしないようであった。

(続く)